

お徳ぶち

那須烏山市下境を流れる那珂川に、川辺かわべという所があつてな。

このあたりは、川が蛇行して、底がえぐられ、大小の岩と、真っ青な水をたたえた深い淵がある。

むかし、川辺は戸数わずか二十数戸の、小さな村だったと。

ある日、川辺の子どものいない老夫婦の家に、お徳という娘がもらわれて来た。

お徳は、可愛いくて優しい娘だった。

お徳が八歳になったある日、一人で使いに出されたんだと。

「お徳、急いで隣村まで、お使いに行つて来ておくれ。てんぼうせん天保銭をなくさないように、気をつけるんだぞ」

と、きつく言われたと。お徳は、天保銭を大切にふところにしまい、急いで出かけて行つた。

ところが、途中まで来て、ふところに手を入れると、天保銭が無いのに気づき、驚いた。

「あれ、銭がない。どうしよう・・・怒られる」

と、目にいっぱい涙をため、夢中で来た道を、行ったり来たり、探したと。でも、どう見つからなかったんだと。涙が止まらなかった。

そして、辺りはもう、薄暗くなつてきたと。疲れはてたお徳は、いつしか、家の近くの真っ青な淵にたたずんでいたと。

ふと、真っ青な淵を見ていると、なつかしいおっかさんのほほえむ顔が浮かんで見えた。

あふれ出る涙をぬぐいながら、

「おっかさあん・・・おっかさん」

と、呼ぶと、おっかさんに誘い込まれるように、淵に飛び込んでしまったと。

後には、赤い鼻緒のついた、すり切れた小さなぞうりが残されていただけだったと。

それからは、誰が言うともなく、この真っ青な深い淵を、「お徳ぶち」というようになつたんだと。